
夏

きよこ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏

【Nコード】

N3881A

【作者名】

きよこ

【あらすじ】

12歳の由香は、おばあちゃんと過ごす夏が大好きだった。大好きなおばあちゃんとの夏の終わり、おばあちゃんは、病に倒れ・・・

夏―前編―

あの夏達。ミンミンゼミが鳴きしきる田舎。あぜ道。トンボが飛んでゆく。

太陽を仰ぎ見るのが疲れたのか、下を向いてしまったひまわり。

田んぼで青々と輝くイネ。

縁側でほほえむおばあちゃん。

戻らない夏。

夏―前編―

私は母の実家が大好きだった。

古臭い農家の家はいつ行っても変わることが無く、その空気は私をいつも心地よく包み込んでくれる。

母は長男の家に嫁いだためか、夏にしか実家に帰ることが出来なかった。

父が寒いところが嫌いだったのも理由だったのかもしれない。

だから私は夏のおばあちゃんしか知らなかった。

暑い夏も風通しのいいおばあちゃんのうちではクーラー要らず。

外に出れば日本の夏らしく蒸し暑くてたまらないが、子供だった私には関係は無く、麦藁帽子をかぶって駆けずり回っていた。

「今年も遠くから大変だったねえ。」

おばあちゃんは4時間車を運転した父にそう声をかけた。

「いいえ。今年は道路がすいてて、楽でしたよ。」

「お母さん。ただいま。」

母はおばあちゃんに軽く挨拶すると、荷物を片手に家の中へと入っていく。

「由香ちゃん来てくれたんだねえ。」

私は車を降りるとおばあちゃんの胸に飛び込むようにそばへ駆け寄った。

「おばあちゃん！久しぶり！元気してた？」

おばあちゃんはうれしそうにニコニコと微笑み、私の手をとってさすった。

おばあちゃんは私に会うと必ず、こうして私の手をさするのだ。それは私への愛おしさの表れのように、おばあちゃんのしわしわの乾いた手が私は大好きだった。

「由香！早く荷物、家の中に運んで。」

母に言われ、私は渋々自分の重い荷物を抱え、家の中へと入る。

昔ながらのおばあちゃんのうちは、玄関入ってすぐ土間があり、8畳間が6部屋の平屋だ。

天井は高く梁が見えるその造りは、どっしりとしている。

「こんにちは。」

母の兄、孝一おじさんが居間から顔をだした。

「こんにちは。お世話になります。」

母に言われたとおり、挨拶すると、孝一おじさんは日に焼けて真っ黒の顔に満面の笑みを浮かべた。

「由香ちゃん、おつきくなっただね。今年いくつだい？」

「12です。」

「もうそんな歳かい。おじさんも歳をとるはずだわ。」

タバコのやにで茶色くなった歯を出して、がははと笑う。

「お兄ちゃん。これ、おみやげ。洋服と、お菓子。」

母が孝一おじさんと話している隙に私は麦藁帽子をかぶりなおし、外へと飛び出た。

大人の会話に交ざっているのは、正直つかれる。

そんなことよりも1年ぶりにこの田舎を走り回りたい。

「由香ちゃん。どこか行くな、ポチも連れて行って。」

通りすがり、おばあちゃんは飼っている犬のポチの鎖を私に手渡ししてきた。

「うん。」

孝一おじさんが去年どこからか拾ってきたポチは野良犬だったため警戒心が強く、1年ぶりの私のことも忘れてしまったのか、うーうーと歯をむき出しにしていた。

「・・・おばあちゃん。無理だよ。怖い。」

「大丈夫だよ。ポチは単純だから。」

そう言っておばあちゃんはポケットから袋に入ったクッキーを私に手渡した。

「そのクッキーあげれば、すぐ由香ちゃんの事大好きになるよ。」

恐る恐るクッキーをつまんで、ポチに差し出す。

待っていましたとばかりにポチはクッキーにかぶりつく。

「うわっ！かまれるかと思った。」

「ほら。もう一個頂戴って。」

おばあちゃんの言うとおり、私の手の中に残る数枚のクッキーをもの欲しそうにきらきらと目を輝かせてポチは見ていた。

「はい。」

尻尾をパタパタと振って、クッキーをあつという間に食べてしまった。

「ほら。もう由香ちゃんのこと好きだって。」

もうクッキーは無いのに、私に尻尾をふる。

「ほんと、単純だね。」

「さ。お散歩よろしくね。」

ポチの鎖をつかみ、あぜ道へ出る。

夕暮れを迎えつつある時間。

ヒグラシが鳴く。

涼しい風を感じながら、遠くに見える山や、広がる田園風景を眺め

る。

風が吹くとイネが一斉に波打ってゆく。

「気持ちいい」

思わず言葉がもれる。

「ポチ。気持ちいいね。」

私の言葉なんて無視して、ポチは私を引っ張りずんずん進む。

これではどっちが散歩しているのやら。

「ポチ！引っ張らないでよ！」

ポチの前に出ようと走る私の行為を競走と勘違いしたのか、ポチも勢いよく走る。

あぜ道を彩る夏の花々たちを横目に走る。

「ただいま」

「由香！どこ行つてたの？夕飯作るのくらい手伝わなきゃ。」

すでに用意された夕飯がいい香りを放っている。

「由香ちゃんにポチの散歩を頼んだんだよ。」

すかさずおばあちゃんがフォローしてくれた。

「そう。遠くまで行つてたのね。」

「うん。ポチ、すっごい元気なんだもん。」

「さあさ。ごはんをお食べ。おなかすいたろ。」

おばあちゃんに促されて、席に着くと、大きなテーブルに旬の野菜が調理されて並んでいた。

ぐうとお腹が鳴る。

孝一おじさん、孝一おじさんの奥さんの順子さんが座り、母と父も席に着く。

「いただきます。」

普段よりも行儀よく、嫌いなトマトも何とか食べる。

だんだんとお酒が入り、私とおばあちゃん以外はほろ酔い気分で宴会開始。

「つまらないだろう？ごはん食べ終わつたなら、お風呂に入ってきて

な。」

おばあちゃんの助け舟で大人の宴会から抜け出す。

お風呂から出ても、大人達の宴会は続いていた。

「由香ちゃん。奥の部屋に布団敷いておいたよ。」

「うん！」

奥の部屋はおばあちゃんの部屋だ。

毎年毎年おばあちゃんと一緒に寝るのが私の恒例。

私が布団に潜り込むとおばあちゃんは私の横に座って、私の手をいつものようにさする。

「由香ちゃんの手はきれいだねえ。おばあちゃんなんてしわしわだよ。」

「私、おばあちゃんの手、大好きだよ。」

「おばあちゃんも由香ちゃんの手、大好きだよ。」

うれしくて、含み笑いをすると、おばあちゃんも真似して笑う。

「由香ちゃんはどうな大人になるんだろうねえ。由香ちゃんが大人になるまで、おばあちゃんも頑張って生きなきゃ。」

「そうだよ！長生きしてね。」

暑い日差しで目が覚めると横で寝ていたおばあちゃんは今もういなかっただ。

「いつまで寝てるの?!」

母の怒鳴り声でガバッと起き上がる。

「今起きた!!」

「今日はお墓参りに行くんだから、早く準備して!!」

「はあーい。」

服を着替え、寝癖だらけの髪の毛を手ぐしで直すと、部屋を出る。

孝一おじさんと順子おばさんは畑に行ってもういない。

冷めてしまった朝ごはんが私の分だけ残っていた。

「早く起きないからよ。」

味噌汁だけは温めなおしてくれたのか、ほくほくと湯気が出ている。

「おばあちゃんは？」

「外でお墓に供えるお花摘んでくれてる。」

おじいちゃんは母が高校生の時に亡くなった。

だから私は会ったこともないし、古い白黒写真でしか姿を見たことが無い。

「おじいちゃんってどんな人？」

「え？そうね・・・子供がすごく好きでね、すごく優しい人だったのよ。」

母が悲しそうに微笑む。

「お母さん、学校がすごく遠くてね、家に帰る頃には真っ暗で。

今みたいに街灯もなかったのよ。

だからいつもお父さんが途中まで迎えに来てくれるんだけど、ほら、高校生くらいだと父親ってちよつとうざい存在だったりするじゃない？

だから毎日帰り道で喧嘩してたのよ。

迎えなんていらない！だめだ！こんな夜道一人で歩くななんてあぶない！って。

今でも、もつと大事にしてあげればよかったって、

何もしてあげられなかったって後悔する。

でもそんな些細な喧嘩も今となつてはいい思い出ね。

お父さんの子供に生まれてよかったってすごくすごく思うの。」

「へえ」

「由香にはまだわからないかな。」

「うっん。ちよつとはわかるよ。」

夜、おばあちゃんと布団を並べて寝ていた。

明日は帰る日だ。そう思うと無性に寂しくて寝付けない。

「おばあちゃん、起きてる？」

隣の布団がもぞもぞと動き、おばあちゃんは私の方に向き直った。

「寝れないのかい？」

「うん。私、もうちょつとおばあちゃんちにいたいなあ」

おばあちゃんは何も言わず、微笑むだけだ。

「おばあちゃんも私が帰ったらさみしい？」

「寂しいよ。由香ちゃんがいなくなるとね、この家が急にしんと静まり返って、家までもが寂しがってるみたいになるんだよ。」

由香ちゃんね、おばあちゃんにとって”夏”なんだよ。

由香ちゃんがこの家に夏を連れてきてくれる。」

遠くで時間を間違えたせみがみんなと鳴く。

涼しい風が流れて、私は大きく深呼吸をした。

「夏って？どうして私が夏なの？」

「夏はね、すべてが活気付く季節なんだよ。」

木々は萌えて、花は太陽を仰ぎ見る。

目覚しい成長が起こるんだ。

由香ちゃんはおばあちゃんを元気にしてくれるの。

生きる気持ちを強くしてくれる。」

そう言って、おばあちゃんはいつものように私の手を取り、さすった。

「毎年毎年、由香ちゃんがくれる夏がおばあちゃんは待ちどおしいんだよ。」

「私もおばあちゃんという夏が一番好きだよ。」

おばあちゃんはいうんうんと何度もうなづくと、私の布団を整えた。

「さあ、もう寝なきゃ。明日は早いんだから。」

朝、いつもより早く起きると外に躍り出た。

昼前に出ると言うので、少しでも長くこの田舎を満喫したかったのだ。

おばあちゃんちをでて少し行くと、小さな小学校がある。

母が通っていた小学校だ。

母は去年ここに私を連れてきて、教えてくれた。

小学校の校庭の片隅にある、つばき。

母が小学校を卒業する時、母の父、つまり私のおじいちゃんと植えたのだそうだ。

シーズンではないので花は咲いていないが、青々と葉が茂っていた。「植えた時はこんな小さな苗だったのにね。」

母がそう言っていたのを思い出した。

私のひざぐらいまでしかなかった苗が、私の身長をはるかに超えている。

「すごいなあ・・・」

日々成長してゆくすべての生き物。

私もどんどん大きくなってゆく。

すうと深呼吸する。

大好きな空気。

もつともつと成長したいと大きく大きくのびをする。

「忘れ物は無い？」

「うん。」

車に乗り込む。

おばあちゃんが寂しそうな顔で車に近づいてきたので、私は窓を開けた。

「また来年来るね。」

「待ってるね。来年は、もつともつとおっきくなってるねえ」

そう言っておばあちゃんは私の頭をなでた。

「おばあちゃんも、体に気をつけてね！私に会うまで元気でいられなきゃだめだよ！」

おばあちゃんはうんうんとうなづく。

「来年も、私が夏を連れてくるよ。」

「由香ちゃんがくれる最高のプレゼントだねえ。」

車はゆつくりと動き出す。

「ばいばい！」

「ばいばい」

手を振り、お別れを言うおばあちゃんの目には涙がうつすら浮かんでいる。

思わず私の目からも涙がこぼれおちた。

2、3歩車を追いかけて、立ち止まり、手を大きく振るおばあちゃん。来年まで会えないおばあちゃんの姿を忘れないように、私はその姿を食い入るように見つめる。

私たちの姿が見えなくなるまで、そして見えなくなっても、おばあちゃんは私たちを見送っていた。

私が覚えているおばあちゃんとの思い出。

いつも一番に思い出すのは、この別れの瞬間のおばあちゃんだ。

そして、この年の夏が、おばあちゃんとすごした最後の夏になってしまった。

夏―後編―

夢に見る。

お別れの瞬間のおばあちゃん。

名残惜しそうに、でも笑顔で、いつまでもいつまでも手をふっているその姿を。

夏―後編―

私たちが自宅に帰って1ヶ月後のことだった。

おばあちゃんが入院したという知らせが入ったのだ。

「これからお母さん、月に何回かおばあちゃんの入院先に行こうと思うの。」

由香にはお母さんがいない間の家のことたのむね。」

「うん。おばあちゃん、なんで入院したの？病気？」

「そう。病気。お母さんもよくはわからないんだけど、ちょっと長くなるかも。」

「そっか。」

嫌な予感がした。

母の表情は思わしくなく、詳しいことは何も話そうとしない。

おばあちゃんが重い病気であることは明白だった。

でも、怖くて詳しく聞く気にはなれなかった。

まだ残る夏の残像が恐ろしい想像を拒んでいたのだ。

私の夏からおばあちゃんの姿を消し去ることを。

おばあちゃんはがんだった。

そう知らされたのは、冬休みの初めだった。

「おばあちゃんね、もう長くないの。」

春まで生きられるかどうかもわからない。

だから、由香。冬休みだから、お母さんと一緒にお見舞いに行こうね。」

そう言われ、訪れた母のふるさとは雪景色に包まれていた。

どんよりと重い雲は、普段なら喜んでしまう雪さえも重い灰色に見せた。

初めて訪れた冬の母の実家。

夏の日差しに輝いて見えた風景は、どこにもなかった。

「由香ちゃん。よく来てくれたね。」

母の実家に訪れると孝一おじさんがにこにここと出迎えてくれた。

その笑顔と裏腹に、孝一おじさんの顔にはくつきりと焦燥感が漂っていた。

「由香ちゃんが来てくれれば、母ちゃんも喜ぶよ。」

毎年夏が近づくと母ちゃんものすごく元気になるんだよ。

由香ちゃんに会いたくて会いたくてしょうがないんだよ。

早く病院行ってあげて。」

私はおおきくうなづく。

私が行くことでおばあちゃんが元気になってくれるといい。そんなかなすかな願いを胸に秘める。

「おばあちゃん」

病室は2人部屋。

重い雲の隙間から日差しがこぼれ、病室に光を注いでいた。

寝ていたおばあちゃんは雪のように真っ白だった。
髪の毛、肌の色も。

「おばあちゃん」

もう一度呼びかけるとかすかに反応する。

「お母さん、由香が来たのよ。」

母がおばあちゃんの耳元でそう言った。

スウと鼻息をたて、おばあちゃんの首が少し動く。

夏に会ったときは、元気に笑っていたのに。

あんなに元気だったのに。

私は涙が零れ落ちそうになるのを必死にこらえた。

「・・・ゆ・かちゃ・・・？」

かばそい、よく聞かなければなんと言ってるかもわからないような
小さな声で、

おばあちゃんは私を呼び、骨と皮だけになってしまった手を一生懸命
私の方に伸ばした。

「そつだよ。由香だよ。」

その手を取り、私はおばあちゃんの手をさする。

いつもおばあちゃんがしてくれていたように。

おばあちゃんの顔がうれしそうに少しだけ動く。

真っ白で血管の浮き出た細い腕。

いつも触れていた手はすっかりやせて、ごつごつしていた。

それでも、変わらないぬくもり。

その手にある暖かさはずっと変わっていなかった。

泣いてはいけないと思うのに、涙ははらりと流れ落ちた。

春になり、私は中学生になった。

勉強と部活に追われ、おばあちゃんのお見舞いにも行けないまま、
春が過ぎていった。

母は月の半分をおばあちゃんとすごし、帰ってくると、少しずつ悪

化していくおばあちゃんの病状を泣きそうな顔で私に語った。

「でも。春越えたね。」

悪化してはいたが、おばあちゃんは頑張って生きている。

「そうね。」

母は悲しそうに微笑む。

「早くお迎え来ないかなって言うの。苦しいって。」

そんなこと言わないでって言うからね、うんって言うんだけど……。

「

でも、苦しくても頑張って生きてと言うのはエゴなのだろうか。

迎える夏。

夏休みに入り部活もやっと休みになった頃、家族でお見舞いに行くと父が話した。

その日だった。

一本の電話。

おばあちゃんが死んだという知らせだった。

変わらない夏。

ミンミンゼミが鳴き、トンボが飛んでゆく。

相変わらず太陽を仰ぎみないはねっかえりのひまわり。

青々と輝くイネはいつものように風になびく。

あぜ道の花々が私を見てる。

またもや私を忘れてうーうーなるポチ。

何もかもが変わらないのに。

おばあちゃんだけがいなくなってしまった。

「由香。こっち来て。」

葬式の準備をしていた母が、私を呼んだ。

「見てあげて。」

お棺を少しあけ、母はおばあちゃんの顔を私に見せてくれた。

「触れられなくなるから、最後に、ね。」

冬に会ったときよりもさらに真っ白になってしまったおばあちゃん。私が動けずにいると、母はおばあちゃんに話しかけるようにつぶやく。

「きれいに化粧してもらったね。」

うつすらと唇と頬が紅色だった。

「看護婦さんがやってくれたんだって。きれいな色ね。」

母はそう言っ、いとおしげにおばあちゃんをみつめる。

「よく夏まで頑張ったよね。春までもたないって言われてたのにね。」

おばあちゃんは夏を待っていたのかもしれない。

私が連れて来る夏を待っていたのかもしれない。

大好きな夏まで生きようと頑張ったのかもしれない。

どんなに弱音を吐いても、頑張って生きようとしていたのだ。

私はそつと手を伸ばし、おばあちゃんの顔に触れた。

硬く、冷たくなっていた。

それでも私は、天国に行ってしまったおばあちゃんに伝わるという、と、

その頬をなでた。

おばあちゃん、私の手をさするその時、きつと「大好きだよ。大好きだよ。」と思いをこめていたに違いない。

だからおばあちゃんの手はいつもぬくもりで満ち溢れていたのだ。私も、伝えたい。

この手のぬくもりで。

触れることが出来なくなっても、ずっと、ずっと。

「大好きだよ。大好きだよ。」と。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3881a/>

夏

2010年10月17日03時48分発行